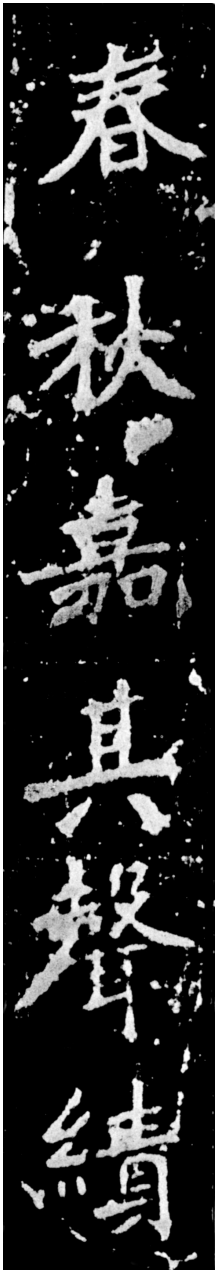


高・大・一般漢字(楷書B)

※楷書A、Bは段級をとわず両方出品も可。

平形 精逸

張猛龍碑③



春秋嘉其聲(声)續

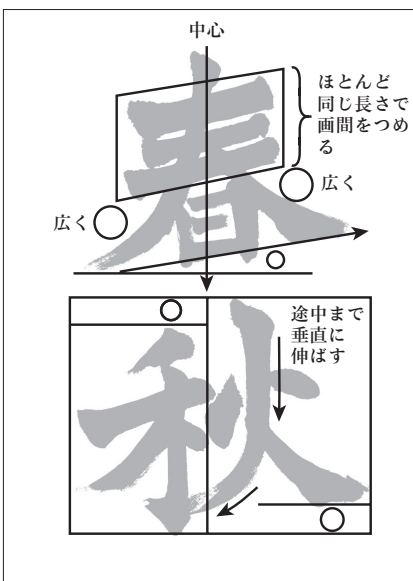
〈今月のワンポイント〉

中国の清時代前期はそれまでの王羲之を中心とする名跡の模本や法帖を学ぶ帖学派が主流を占めていましたが、中頃から北碑を正統とする碑学派が台頭してきます。阮元が書論の代表格『南北書派論』『北碑南帖論』を著したことは有名ですが、続いて包世臣・康有為も北碑の価値を称揚しました。この康有為は『広芸舟双楫』の中で、張猛龍碑を「峻整」と評しています。「峻」とは「きびしく険しい」ことですから、その中にも整っている要素が入っているということでしょう。

〈学習上の留意点〉

「春」：初めの三画を思い切っつめ、左右はらいを悠然と伸ばし、その中に「日」がおさまっています。普通は「日」の半分くらいが下に出ますので独特の字形をしていることがわかります。補助線からも「日」が右に寄り、はっきり前傾していることが理解できます。

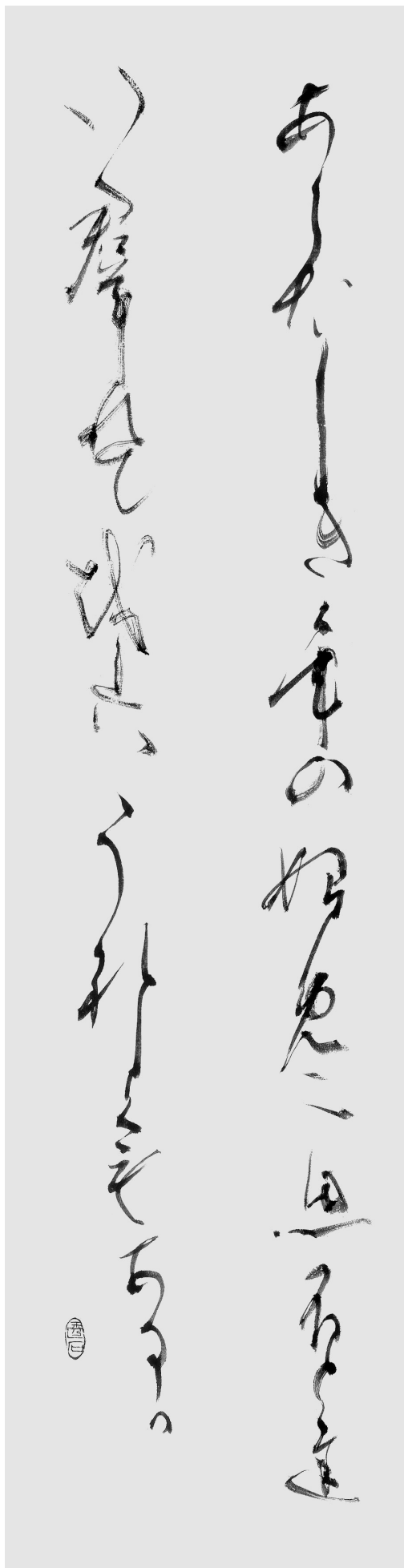
「秋」：一画目の左はらいを短くして、次の横画の長さを強調しています。旁の左はらいの前半は垂直に構え、全体を偏より上部におさめ、右上がりの効果を高めています。



高・大・一般 仮名

新(10級から五段までは作品用紙として画仙紙八ツ切り(68cm×17.5cm)又は、画仙紙半切(136cm×35cm)の出品。六段から八段までは作品用紙として従来通り画仙紙半切(136cm×35cm)のみの出品です。

清水 透石



半切に和歌を書く

〈釈文〉 あらたしき 年の始免二 思不ど遅い群れて越連バ う礼しく毛ある可
 〈出典〉 万葉集 卷十九 道祖王 (四二八四)

【歌意】 新しい年の始めに、親しい人たちが集

まって居れば、うれしいことだ。

(平安時代以後は、アタラシという形に変わった。)

【揮毫上の注意】

発表作品は常に何ほどの新鮮味が欲しい。それには、常に新しい感覚と技術の錬磨が求められる。大字かな作品では剛健、柔軟など漢字の力強さを入れて、調和



を図ることが大切である。行の中央は幅広く直筆で運筆し、この部分は潤筆で表現した

い。「思不と遅」は、次第に中心を右に移しつつ軽快に連綿し、行末は上からの重味を受

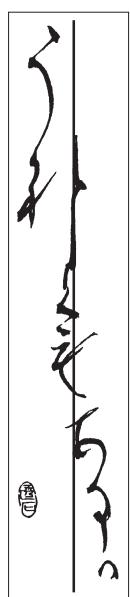


け止めたい。二行目、「い群れて越連バ」は、大胆に渴筆で、筆鋒の割れは気にせず、闊達に書きたい。「群」は、偏・旁を上下にして、

長く直筆で切っ先の鋭い線を引き、それに続く「れて」は懷を広く、「越連バ」は背勢で

緊密な形にまとめましょう。使用する紙、筆の含墨量にもよるが、自然に渴筆がでるよう、

印刷した手本では見づらいが、大胆に変化を表現したい。墨つぎしての終句「うれしく毛ある可」は、一字一字は傾けることなく、雅印を押す余白部を確保するよう中心を右へ。



【まとめ】

書は「線」の芸術である。形は真似ることは出来ても線質は簡単には表せない。線の厳しさや柔らかさは、書く人の心と技術の準備がなければ作品の上には出てこない。日頃の学書の中で培われるものである。